

おんく愛人

会報 第二十五号

発行日 平成十二年七月三十一日
編集人 南洲吟道会広報局
発行人 理事 吉永洲神
発行所 〒565-0855 東京都中野区白鷺一三四一五
日本吟道学院南洲吟道会

TEL・FAX 〇三(三三三三〇)七〇〇九

記念すべき創立20周年記念全国大会

合吟コンクール“優勝”に乾杯!!

またも優勝

“グランプリを懸けた合吟コンクール”

吉永洲神

5月21日学院創立20周年記念全国大会合吟コンクールにおいて、またもや優勝出来たことは真に嬉しくご同慶の至りでございます。長友瑤龍・伊藤和祥・奈良藍城・内山陽城・角野明城の皆さん、おめでとう。よく頑張りました。よく期待に応えてくれましたネ。

本会は、これで全国大会で七回目の優勝となりました。準優勝は五回の輝かしい成果を収めています。同志・会員の努力のおかげと感謝いたします。

今年も、1月16日の盛大な初吟会で幕を開け、4月23日の昇段審査会、5月3日の本会定時総会・研修会、5月21日全国大会参加、6月17日総本部正会員大会・通常総会参加、6月25日女流大会参加と事業は順調に進捗しています。

新入会の方々も今年一月以降27名の多きに上ります。

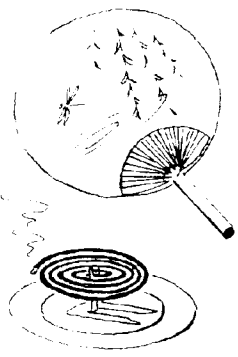
鈴木正龍(10名)、小田代武城(6名)、広瀬正龍(3名)、広瀬美水(2名)、松本龍江、小泉泰龍、畔柳弘洲(各1名)、その他(3名)。以上の皆様のご尽力によるものです。平成12年は、学院創立20周年に因み、会員増強年間と銘打って全国的にその運動を展開しておりますが、よくこれに添えて下さいました。茲に誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。有難ございました。

新入会の同志をお迎える度に思うことは、先輩は後輩を慈しみ、後輩は先輩を立てて互いに「思いやりの心を大切にしましょう」ということです。本会に「いじめ」があってはなりません。それは本会のモットーの一つである「敬天愛人」の教えであります。健康に充分留意しながら、楽しく吟じつつ、互いに切磋琢磨して参りましょう。

今の世の中は、実に混沌としており陰惨な事件は後を断ちません。政界、官界何れも頼りになりません。頼りになるのは「吟友のみ」とさえ思います。

南洲吟道会の同志・会員の皆様、一致団結して吟道に勤しみ社会の一隅を照らす気持ちで汚れた社会に新風を吹き込もうではありませんか。

(理事長)



創立二〇周年記念 第3回日本吟道学院

女流吟道大会に参加して

吉永龍陽

平成十二年六月二十五日(日)江戸川区総合区民ホールに於いて開催され本会より三十二名の参加があり、合吟「母を想う」と吟詠組曲「風雅」のなかの「葉日記抄」を高段者の方々に吟願い、長い詩をしっかりと覚え吟じ、整然とした態度とマイクの使い方等、大変良く吟じられ嬉しうございました。また、秋田の加藤明龍さんの「金縷の衣」の吟に乗って有坂静鏡さんの舞が華を添えました。

合吟は、加藤杏水さん母娘が吟じられ微笑ましい光景でした。また、独吟は木代妙祥・霜鳥清祥・浜口萬龍の皆さんが見事に堂々と吟じられました。

役員吟詠では、吉永洲神常務理事が「心に太陽をもて」を説得力をもって素晴らしく吟じられました。

女流大会は、参加人数により独吟の番数が増えますので、大勢のご参加を歓迎いたします。

役員のみなさま前日と当日とご苦労さまでした。感謝申し上げます。

(会長)



創立20周年記念全国大会に参加して

龍陽会 長友 瑤龍

今回の合吟コンクール出場の練習にあたり、私は初心に戻り、基本から努力することを目標と致しました。また、皆さんとは心を一つにすることが合吟の大事なポイントであることと信じて努力を致しました。

その結果が、結句の「・・に眠る」のところ息がびたりと気持ち良く合ったことに、象徴的に表れたと思えました。

この機会を与えて下さいました洲神先生、龍陽先生に心から感謝申し上げます。また、会員の皆様方のあたたかいご声援まことにありがとうございます。

龍陽会 伊藤 和祥

去る五月二十一日の二十周年記念大会、合吟コンクールに出場させて頂き、優勝という一つの目標に向かって皆さんと共に努力し、目標を達成できました事は、私にとりましてこの上ない喜びです。これも偏に理事長先生、会長先生を始め長友先生のご熱心なご指導の賜です。

また、長友先生以下五人が心を一つに一致団結して取り組めた事も幸いでした。

森総裁から優勝の賞状を頂きました時は、本当に感激致しました。私はまだまだ未熟ですが、これをバネに更に吟道に精進してまいりたいと思います。

今後共どうぞよろしくご指導の程お願い申し上げます。
皆様のご声援ありがとうございました。

いずみ会 奈良 藍城

輝く二〇〇〇年の初日の出を、幸運にも健康で迎えられ、嬉しい一年の幕明けでした。千載一遇のチャンス、日頃の熱意籠もる御指導の御恩に報いる為、悔いのないよう地道に精一杯努力を重ねました。和する事に心掛け、目標を高く、五人の心が一つに和しての勝利でした。

南洲吟道会の皆様の応援、優しい心配りに感謝申し上げます。

いずみ会 内山 陽城

長友先生は、最初から「七本でも、しっかり、メリハリをつけて聞かせる吟をやりたい」とおっしゃってました。はたして、未熟な私達がどこまで出来るか不安が大きかったので、五人の約束は「合吟でそろうためには呼吸をきちんと合わせる」ということでした。

真剣に集中練習を全員必死の思いで頑張りました。出場直前、龍陽先生から「マイクに近づくように」との指示があり、緊張の土台へ立った。長友先生の迫力ある吟題が会場にひびきわたる。結果発表「優勝」と聞いた時、感激で目がかすんだ。マイクの使用方で迫力倍増の吟の勝利だ。記念すべき年に優勝の栄冠に導いて下さいました洲神先生、龍陽先生の大きい力の支えを有りましたことは、言うまでもありません。

本当に有難うございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

いずみ会 角野 明城

日本吟道学院創立二十周年という節目の大会に、合吟コンクールのメンバーに加えていただき、その上、優勝という栄誉をいただきましたことは、本当に、本当に感謝・感謝でございます。

ただただ、大きな声で技術が伴わない私を、時には厳しく、時にはフォローをして下さりながら練習をつけて下さった龍陽先生、そして「練習過程を大切にしようね」と言って、私達を引っ張ってくださった長友先生。いつも暖かく五人を見守り続けながら、ここぞという時には「ポン」と背中を押して下さる洲神先生、私にとりまして二ヶ月の練習期間がとっても勉強になり、また、いい思い出になりました。

諸先輩方と共に、本番の舞台で気持ちひとつになれましたことは、大きな喜びです。応援をどうも有難うございました。



優勝カップを囲んで喜びの皆さん

鹿児島

八王子会 脇 成城

鹿児島

平山 成信

奇峯峭拔水中央
曲浦廻汀相接長
此地何多出豪傑
西郷逝後東郷

奇峯峭拔、水の中央
曲浦廻汀、相接して長し
此の地何ぞ多く豪傑を出だす
西郷逝いて後、東郷有り

○ 奇峯峭拔——桜島を云う

由来鹿児島は、幕末より明治にかけて幾多の英雄俊傑を

本部だより

平成十二年度定時総会開催される

さわやかな五月晴れの五月三日(祭日)平成十二年度定時総会が鷺ノ宮地域センターにて開催されました。総会への出席者は会員総数200名中出席者179名(うち委任状出席108名)。

開会の辞、国歌斉唱に続き西本龍秀事業局長の先導による「敬天愛人」の大合唱が行われ、予定どおりに進行されました。理事長先生、上村健二顧問のご挨拶に続き、平成十一年度事業報告及び各大会入賞者の表彰披露、新入会員の紹介と一年間の活動の流れが理事長先生より報告されました。B4サイズの用紙両面に印刷された一年間の事業内容の量の多さに、会員の活躍ぶりと理事長先生、会長先生お二人の強靱な体力に頭が下がる思いでした。続いて川村経理局長を中心に十一年度の会計報告があり、特に大成功であった二十五周年大会の報告は、支出内容もこまかく明確にされ、五年後の三十周年大会のお手本ともなる内容報告でした。議事は、順調に進み、吉永理事長先生より十二年度への期待と事業予定が発表され、若干の質疑応答の後、すべて満場一致で承認されました。赤山双龍理事の万歳三唱にて総会は終了し、新しい年へのスタートとなりました。

(広報局)

☆☆☆☆

青春教場誕生、おめでとございます。次の方々が入会されました。栄を祈ります。

青春教場は、鈴木正龍相談役を中心とした有志者による、金ノ宮地域センターにて開催されました。

ご親族等の「集い」です。

- ☆小泉 すん 会員No.六三八(12・4・1付) 市川市市川南一―一四
- ☆鈴木 順子 会員No.六三九(12・4・1付) 文京区千駄木三―四一―四〇三
- ☆鈴木 友子 会員No.六四〇(12・4・1付) 文京区千駄木三―四一―四〇三
- ☆鈴木 真琴 会員No.六四二(12・4・1付) 文京区千駄木三―四一―四〇三
- ☆鈴木 寛 会員No.六四三(12・4・1付) 埼玉県北葛飾郡松伏町松伏三一九二
- ☆藤塚 道雄 会員No.六四四(12・4・1付) 埼玉県北葛飾郡松伏町松伏三一九二
- ☆志田 勉 会員No.六四五(12・4・1付) 文京区千駄木五―一六―一五
- ☆穂葉 高一 会員No.六四六(12・4・1付) 市川市曾谷六一五―九
- ☆穂葉 高子 会員No.六四七(12・4・1付) 市川市曾谷六一五―九
- ☆穂葉 淑子 会員No.六四八(12・4・1付) 市川市曾谷六一五―九

更に次の方々が入会されました。どうぞよろしく。

- ☆小林 守一(熟年) 会員No.六四八(12・4・1付) 中野区白鷺三―一―一三
- ☆橋本 久夫(習志野会) 会員No.六四九(12・5・2付) 習志野市谷津五―四四―一四
- ☆山本 晃司(習志野会) 会員No.六五〇(12・5・2付) 習志野市谷津三―二九―七―三〇
- ☆小笹トシ子(習志野会) 会員No.六五一(12・5・2付) 習志野市谷津三―三三―一八―二〇
- ☆高梨 豊秋(習志野会) 会員No.六五二(12・5・9付) 習志野市香澄五―七―九
- ☆神田 房子(熟年) 会員No.六五三(12・5・24付) 中野区若宮三―五六―一六
- ☆小田千恵子(習志野会) 会員No.六五四(12・6・6付) 佐倉市八幡台一―一―一五
- ☆横山 とみ(熟年) 会員No.六五五(12・6・14付) 中野区若宮一―四三―一四
- ☆長峰 俊雄(習志野会小田代教場) 会員No.六五六(12・7・1付) 習志野市谷津三―一―四一―九〇
- ☆持永 泰子(習志野会小田代教場) 会員No.六五七(12・7・1付) 習志野市谷津三―一―四二―六〇
- ☆香取 一郎(習志野会小田代教場) 会員No.六五八(12・7・1付) 習志野市谷津五―二二―二三

平成十二年度春季昇段審査 結果報告

四月二十三日(日)本会春季昇段審査会が、鷺宮高齢福祉センターに於て肅々と実施され、次のとおり審査決定されました。

一般の部							少年の部		
十段	九段	皆伝	四段	三段	初伝	二段	初段	四級	一級
四名	二名	二名	七名	七名	五名	二名	二名	名	名
範師	教授	総伝	七段	奥伝	六段	五段	中伝	名	名
計	一名	一名	十一名	五名	二名	二名	三名	計	計
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
十二名	十二名	十二名	五十四名	七名	七名	四名	四名	名	名

詩歌投稿

熟年教場 小宮正龍

俳句

筆ぐせに 元氣と知れる 年賀状
よき声に 争ひてをり 初雀
むれ遊ぶ 吹雪の中に 寒立馬
髪のに 落花をつけし まま歩く
咲けば散る 命短き 桜愛づ

八王子会 中島濃城

俳句

お台場の 歴史訪ひをり 風光る
さえずりの 雲雀見おろす 朱雀院
金婚の 旅つつがなし 夕牡丹
傘さそご 牡丹の命 潔し
富士山も 詰めて新茶の 荷が届く

本会総会後の研修会に参加して

習志野会 小田城教場 成田史郎

本年四月小田城教場開設と同時に入会して一ヶ月を経過、五月三日の研修会に初参加した。初めての参加であり、心配と不安でドキドキし乍ら会場に入った。

先ず出席者の多いことに圧倒された。

開講と同時に受講者は全員真剣な面持ちで熱心に聞き入っていた。理事長、会長両先生の講義が始まるやいなやその内容を一言半句聞きもらさない様にと云う雰囲気であった。理事長の講義内容も中国の歴史から発音の正誤吟じ方等こと細かに易しく説明されてよく理解出来た。

吟とはただ声に出して吟じるのではなく、その内容を良く理解し漢詩の複雑なルール等頭の中で咀嚼し腹の底からの発声で吟じなければ人に感動を与えられないものであることを痛感した。

今後この様な合同研修会の開催の場合はずい参加し勉強していきたい。

全国大会に参加して

三菱自動車吟道部 佐藤廣水

今年創立二十周年、第四十回大会ということなので、真におめでたい大会だったといえます。

今回は勉強になるぞ、ばっちり録音をとるぞと意気込み、器具を念入りに整えていったのでした。会場に入ったところで、先輩の中島昭祥さんに出会い、当番の会旗係を手伝うことになりました。

当番の方はスムーズにゆきましたが、会場内を覗きに行くいとまはなく、ロビーまで時々かすかに漏れてくる音に耳をそばだてると言った風でした。『ロビー用に、会場の様子が

分るビデオでも置いてくれたらなあ」とぼやいてみる。色々の係りを担当されている裏方役の皆さんのご苦労が、良く解りました。出演の練習時と本番の時だけ、ちよっぴり会場の雰囲気味わったのでした。

しかしながら、最後には最大級の感激を戴きました。台吟コンクールでの『南洲吟道会優勝』と発表された時です。皆さんと一緒に優勝祝賀会で祝杯を挙げる事が出来て幸せでした。五人の選手の皆さん!!真におめでとうございました。

個々人の努力もさることながら、会長先生の演出効果まで踏込んだきこまかい指導に見事応えられたからこそその優勝と、今更ながら、感じ入っているところです。南洲吟道会万歳!! 私たちにとっても、元気を貰えた大会でした。

二十五周年大会の

舞台裏から見えるもの

立ち見席も出る程、大盛況の本会二十五周年大会。舞台の裏側は、華やかなスポットライトとは裏腹の種々の人間模様を写し出す。

出番が近づくと舞台の袖に出来ない人。いろいろ探し回るも見当たらない。順番の確認をするも返事をしない人。中には「分かってます」と素っ気無く言う人。果ては「私の名前を覚えておきなさい」(招待者)と言う人まで現れる始末。緊張の高鳴りで水を要求する人、出番直前に伴奏の本数の変更を平気で願う出る人(招待者)。場内が熱いとか寒いとか。暗すぎてプログラムが読めない等々、わがまま言いたい放題の人達でてんやわんやである。

狭い舞台裏で我慢と自分に言い聞かせるが、時おり屈折した思いも去来する。心の乱れや冷汗を抑える間も無い状態がズーと続く。

袖で出番待ちの高齢者を見かねて、椅子を差出したところ「ご苦労さまです。どうもありがとう」の言葉に一瞬救われ

る思いを感じ、昼食もとらずに終演を迎える。

無事に終了したことの安堵感と立ちづくめの八時間余で腰のあたりに初めて違和感を覚える。
ごく一部の人の言動とはいえ、同じ吟を愛する同志としては、甚だむなしさを隠しきれませんが、本会次の三十周年へ向って、これらのことを良い教訓としてステップアップに全員皆で努めたいものです。
(中野セロ黒字子記)

その後の西郷どん(その四) 進攻敗退

上村健二

大山県令は西郷等の「政府に尋問の筋これあり兵を集めて上京したい」の申し入れに対し、その無謀、不用意、政略も軍略もないことに危惧をいだいたが、西郷のために兵糧、資金を用意した。そして途上の各県、政府・各鎮台宛に使節を立て通報した。そのうちの熊本鎮台宛の通報は「今般政府へ尋問の廉これ有り、明十七日県下発程、陸軍少将桐野利秋、篠原国幹及び旧兵隊のもの随行致し候間、その台下通行の筋は兵隊整列指揮を受けらるべく、此段御照会に及び候也。陸軍大将西郷隆盛、熊本鎮台司令官殿」というものであった。西郷はこれを見て、その暴慢無礼に驚き「すぐ取り消し」を大山県令に申し入れた。西郷はあくまで平和裡に熊本を通過

